

釧路南ロータリークラブ会報

第 30 回 例 会 報 告 2008.2.22 通算 1241 回

・点 鐘 佐野会長

・ロータリーソング

「我等の生業」

ソングリーダー 菅井 紀幸会員



高橋会員



木内会員

・お客様と来訪ロータリアンの紹介
釧路ペンギンの会 桜井 智恵子代表

・入会記念祝

工藤 ゆかり会員 H 8. 2. 23 (12 年目)



・会 長 挨 拶

2 月 8 日の例会に菅井会員がお連れになったお客様 長井一広さんがこの度当クラブに入会の推薦がありました。理事会では承認を頂いております。本日より 7 日間の期限を持ちまして、会員からの異議申し立てがなければ、入会が承認になります。会員皆様のご賛同をお願い申し上げます。今年度最大の目標である会員増強ですが年度始めには毎月新入会員がいましたが、最近数ヶ月入会者がありません、下期残り 4 ヶ月です。どうか今年度中に 30 名以上の会員数にしたいと思いますので、入会の推薦をお願い申し上げます。

・幹事報告

- * ご案内の通り、来週は金曜の 29 日は休会となり 27 日に北クラブさんとの合同例会ということになります。お間違えないようお願いいたします。
- * 菅井会員のご紹介で入会予定の長井さんの会員推薦用紙をお送りしております。理事の承認をお願いします。承認がとれ次第各会員へ FAX いたします。承認をお願いします。
- * 本日、例会終了後理事会を開催します。
- * 釧路北ロータアクトクラブより 1 月の例会報告を拝受しております。

・委員会報告

親睦委員会

- ・本日のニコニコ献金

工藤ゆかり会員	入会記念祝として 上期 100%出席
長江 勉会員	上期 100%出席
清水 哲会員	上期 100%出席
花田 善廣会員	上期 100%出席
木内 治彦会員	上期 100%出席
長倉巨樹彦幹事	上期 100%出席
船戸 創二会員	上期 100%出席
福井 克美会員	上期 100%出席
佐藤 玄史会員	上期 100%出席
佐野 実会長	上期 100%出席
高橋 康成会員	上期 100%出席

クラブ奉仕委員会

- ・家庭集会のご案内

出席委員会

会員 16 名出席 出席率 61.5%

・本日のプログラム

「職業紹介例会」

担当 職業奉仕委員会

●福井克美職業奉仕委員長

本日の職業奉仕表彰は、社会福祉協議会から 7 点ほどご紹介を頂いた中から理事会で選考した結果、桜井さんに決定させて頂きました。それでは桜井さん

の簡単なご紹介をさせていただきます。桜井さんは、旭川市出身で父親の転勤で釧路にこれ釧路市内初の歯科衛生士として太平洋病院に勤務されました。桜井さんは日頃より、ハンディキャップを持たれた方の支援をされており、釧路市内の障害児者のスイミングサークルとして、17 年前から「釧路ペンギンの会」、6 年前から「くしろ—SEA—らいおん」の二つのサークルで、ボランティアの方と保護者により活動を続けています。サークルに参加している障害児者の方は、水泳選手として全道大会や全国大会などにも参加して好成績を残しています。このような実績から障害児の方や保護者の方からも信頼が厚く多くの方に希望を与えています。今年は道東で初めての「北海道ハンディキャップ水泳大会」を釧路で受け入れることになり、準備で忙しい中を当クラブの例会のご足労いただきました。大会が成功裏に終えることをご祈念申し上げご紹介とさせていただきます。

① 職業奉仕表彰：

釧路ペンギンの会 桜井智恵子代表



本日は、本当にありがとうございました。今日は私どもボランティア活動している仲間と一緒にこ

の表彰を受けたいと思っておりました。重ねてお礼申し上げます。私どもがボランティアさせて頂いてます「釧路ペンギンの会」、「釧路—SEA—らいおん」と言うのは非常に他とは違う形態をとっておりまして、北海道おそらく全国でも一つじゃないかと思うのですが17年前から水泳を教える事だけではなく、「一緒に共存しよう」と言う事で水(水泳)を利用して健康維持や楽しみを伝えていく考えの元にやってまいりました。その結果が全道大会や全国大会に出場できる子供たちが出てまいりました。ボランティアだけで支えると言うのは非常に難しい面もありまして日本中どこでも立ち上がって消え維持する事が非常に難しいです。でも釧路の風土というには釧教大の水泳部を始め、みなさん少しずつでもボランティアの気持ちを持った方がたくさんいらっしゃるという事で、私は釧路出身ではないですが本当に釧路の事が好きでございます。それと、秋の夕日の中で私は結婚して釧路に残って楽しいボランティア活動をさせて頂いております。自分が楽しんでいる事にこのような名誉ある表彰して頂きまして本当に嬉しく思っております。今年は9月14日にハンディキャップの全道水泳大会が釧路で開催する予定になっております。資金の集めも釧路市の絶大なる賛同を頂きまして、助成金と言う形で頂く事となりました。他の部分につきましても全て寄付で運営し、かつ自主財源で私どもボランティアも一口いくらと言う形で納めましてこの大会を成功させようと思っておりますので、その点に関して皆様のご協力の方宜しくお願い申し上げます。本当に本日はありがとうございます。

②職業紹介

●菅井会員



今日は職業紹介ということで、簡単ではございます

が、お話をさせていただきます。私の職業分類は医療事務となっております。どういう仕事かと申しますと、医療機関から毎月出される診療報酬明細書(レセプト)を点検する業務をしております。ほとんどの医療機関でコンピューターによる入力が行われておりますが、入力ミスなどの間違いがないか確かめる業務です。

●清水会員



昔満州に居た頃の話です。今の中国ですね、中学に入って初めての休日に学校の近くの公園で、花壇を背景に写真を撮ってもらいました。写真機は大きめのみかん箱位の箱型で、前面にレンズがついて三脚で支えられボディは櫻材の立派な物でした。先ず写真を撮りますと、フィルム代わりになる印画紙を現像しその陰画を接写して陽画に反転、写真にするというやり方でした。そのみかん箱位の箱がカメラであり兼現像室であり複写装置なのです。写してから出来上がるまで20分位もかかったのでしょうか。出来上がった写真は濡れた酢酸の強い匂いの儘でした。今考えると幼稚な初歩的な写真だったのですが、その時はびっくり眼を瞪るような世界でした。飽きもせず夕方まで見ていたのを思い出します。その頃は大战の最中で物資不足で余程の人で無い限りカメラ等を手にする事はありません。一応、国産のカメラやドイツ製の小型カメラがあったのでしようがカメラを持ち歩く人は即スパイと間違われるような時代で我々子供が小型カメラ等目にする事ありません。加えてフィルム、印画紙、薬品等はほとんど統制品で写真館経営も儘ならない時代だったと思います。1945年に終戦となり、平和産業の目玉としてカメラが雨後の筍の様に色々なメーカーから発表され

戦時中、年に2,3本しか配給されないフィルムで肩身が狭く、シャッターを一枚切るのに考え考え写真を撮っていたアマチュアカメラマンもこの時期やっとのびのびとシャッターが切れるようになったものです。一方、写真スタジオの機材の方はなかなか戦前の体制に戻らず、1952〜3年頃でもまだガラスの乾板で仕事をやっていたと思います。私が札幌の写真館でアルバイトをしていた頃は落とせば割れるガラスの乾板ネガがまだ残っていました。さすがに私が写真スタジオを開業する1958年にはフィルムその他の感光材料は大体そろっていました。勿論その頃はモノクロ写真で、暗室に入り一枚一枚現像し修整し焼付けをして写真にしますのです。アマチュア写真の方は、印画紙のセミオートプリンター等が開発されて写真館が副業にD,P,Eをやっていたようです。D,P,Eこれはデベロッププリントエンラージの事です。終戦後すぐに復興し生産されたカメラが出まわりはじめブームとなり相当の需要があるものと見込まれてD,P,Eこれを専門にする業者も現れ、小型カメラの発展と共にカメラ人口が増加、若いも若きもカメラを首にしておりました。眼鏡をかけカメラを持っていたら日本人と思えば間違いないと言われた頃でした。まだフィルムはモノクロで2眼レフカメラ等に使うブローサイズが主流でした。ニコンを始めキャノン、コニカ、ミノルタ等がこのころから35MMカメラを主力に生産し始めました。現在に続く35MMカメラの全盛時代です。感光材料の貿易自由化はまだまだ先でアメリカのコダック社が、商品化できるカラーフィルムの改良に成功したとニュースで聴き、さすがアメリカのコダック社と感心したものです。2年程遅れて日本のオリエンタル写真がリバーサルカラーを発表しました。1958年10月フジフィルムがフジネガティブ35を発表、曲がりなりにも焼付け出来るフィルムが開発されたのです。その頃ネガカラーフィルムと言えばアメリカのコダックか西ドイツのアグファが双璧で日本でもフジ、さくら、オリエンタル等のメーカーがありましたが、フジがやっと、後は開発途上で発色、描写力で大分に見劣りし一般の人でもコダックの描写力にはフジ、さくらは到底及ばない。コダックのフィルムを手に入れてくれとよく依頼されました。そのころ北海道では、千歳の米軍基地のPXで扱っており手に入れることが出来ました。貿易自由化でアメリカのコダックが入ってきたら弱い日本のフィルムメーカーはひ

とたまりも無いと思っておりました。これに引き換え日本の小型カメラは、国内の人気に支えられ品質、価格共に世界の水準にあり日本の小型35MMカメラに肩を並べるのは西ドイツのライカ、コンタックスぐらいになってしまいました。アメリカは、このカメラ王国日本を早くから標的にし、感光材料の貿易自由化を要求してきましたが、食料の米と同じく日本の弱いところでしたので、必死で自由化に抵抗、フィルムの輸入制限はまだしばらく続きます。輸入制限が解け、入ってくるのは3年くらい後になったと思います。この頃1963年発表されたのが国産のフジカラーN64、発売が64年にずれ込むとの事でネーミングがフジカラーN64となったそうです。この製品を見てフジカラーの経営陣は、一寸物足りないが何とか自由化に対応出来ると胸を撫で下ろしたと聞きました。続けて1965年フジのフジフィルムN100が発表になりこのフィルムの性能がわりと出来がよく、フジもコダックに追いついたかなといわれました。その頃大のお得意様であった映画界はコダック一辺倒だったのですが、日本の映画会社でフジフィルムを使ってもらい話題になった事があります。フジがコダックと肩を並べたと国内の新聞では書き立てられましたがとてもとてもまだままだの感でした。一方、写真スタジオでは今まで色の付いた写真を撮った事が無く、手探りの状態でした。大判のカラーのフィルムはアマチュア用の35MMフィルムから少し遅れて発表になりました。これからいよいよスタジオもカラーの時代と張り切るのですがなかなか思うようにはいきません、今までのモノクロ時代は撮ったらすぐ暗室に入り、現像をし自分でプリントするのですがカラーの場合、ラチュードが極端に狭く液温管理が厳しく0.1の液温の差で色が大きく変わります。薬液に浸すフィルムの温度だけでも0.1〜0.2度は上下し安定せずモノクロ時代の皿現象の技術では歯が立ちません。必然的に2,000万円以上もする現像設備が必要となり、後々普及型が開発されるまで自分で撮った写真フィルムを自分で現像する事も出来ず現像プリントを外注する時期がしばらく続きます。アマチュアの方は勿論、自分で処理する事は不可能なのでメーカーラボに送って現像プリントしてもらうようになります。その頃から業界の強い要望もあり街の写真屋でも持てる現像機プリンターが

開発され出回るようになり、私どもも何とか設備する事が出来たわけです。その当時自分でやってもなかなか思った色には焼きあがりません。モノクロ時代と異なり、顔の色の良い悪いは子供でもわかるので誤魔化しがききません。毎日が色との格闘でした。また定着力が弱くいくら保存に気をつかっても1年もたったら小豆色に退色してしまい太陽の強い光を受けたら数時間で変色してしまう様なものでした。これはアマチュア写真もスタジオ営業写真も同じ苦労をしたものです。この頃までは発色について果てはアメリカのコダック社の方が一日の長があったのですがフジカラーN100が発売になりフジ、コニカが総力を挙げて巻き返しフィルムの自由化の頃には国産のフィルムもある程度の品質になっており日本人の根底にある国産のカメラは優秀、フィルムを含めて日本製が世界一のフジフィルムの宣伝に乗せられた感があります。コダック社が世界中の国でフィルムを売っていてその国その国のシェアの70%以上を占めているのに日本だけは どうして逆なんだと経営陣が突き上げられたと聞いた事があります。コニカが100年プリントと言うコピーで顧客に安心感を持たせました。カラープリントが不安定な感覚はこの頃にはもうありません。1990年頃、この頃が銀塩カラー写真の全盛時代でした。街のD,P,E屋もそこそこに潤ったようです。当社等も夏のシーズンは一日平均100本位のフィルムが集まり手間のかかるスタジオ撮影を敬遠したものでした。アマチュアカメラマンが活躍した分、スタジオ写真にしわ寄せがありまして大事な収入源である一年生の入学写真はおろか、成人式、婚礼写真まで写す強者まで現れ驚きました。その頃ソニーからこれからのカメラとしてデジタルカメラが発表になりました。いつかこのデジタルカメラの時代になるのだとおぼろげながら感じたものでした。なぜなら動く物の記録は当時8MMフィルムだったのがあつと言う間にビデオに取って変わられました。ビデオは音も一緒に収録できるという利点があるとはいえこのフィルムの時代はそう永くはないなと言う感覚は早くから感じておりました。一般のデジタルカメラが出始めた頃が1985年頃であったでしょうか。当初5万画素よくて10万画素くらいの物だったようです。その頃所用でフジフィルムの本社に行ったことがあります。技術の人たちと話になった時5万画素や10万画素では写真にならない、せめて500万画素くらいはほしいとそれでは

ければ銀塩フィルムに太刀打ち出来ないと申したところその当時で今うちの会社で1000万画素や2000万画素位の製品を作れと言われてたら直ぐにでも作れる能力はあります。しかし、周辺機器が付いていけないのです。例えばニコン、キャノンですとC,Fコンパクトフラッシュと言いまして普通カメラのフィルムの役目をするものですが、今は4ギガバイトくらいあるのですがその頃8キロか16キロバイトしかなくこれやパソコン等が整備されれば製品化出来ますよと申してました。それを聞きましてやはりデジタルカメラの時代になるのだと確信を持ちました。1990年フィルム写真ピークの頃で夏のシーズンともなれば1日平均100本のフィルムが集まりこんなに需要があるのにこれが無くなるということが信じられませんでした。ですがメーカー予告通り毎年15%ずつ処理量が減り始め昨今はピーク時の十分の一の位の状態です。フジ、コニカ、コダック、三菱のメーカーラボは軒並み撤退、個人のD,P,E屋さんが細々と営業しているだけです。デジタルカメラを持つくらいの人にはパソコンあるいはプリンターを持っており又このプリンターが新しく開発されたインクジェット方式で苦労しないで良い色が出るのです。内輪話ですが、このインクジェットの方式は褪色が激しくまだまだ改良の余地があります。そんなこんなでD,P,E屋さんの入り込む隙が無いわけで我が世の春を謳歌したD,P,E専門屋さんも幕をおろしました。私共も最後までねばりましたが、時の流れには抗しがたく一昨年D,P,E部門から撤退し現像及びプリントはメーカーラボに外注する事にしました。その分スタジオ撮影に力を入れております。最近のアルバム制作技術も格段にアップし印画紙のまま製本できる技術が開発されました。



・ 次回のプログラム

2月27日(水)

「 福司にて北RC合同夜間例会 」

会場 福司酒造

担当：親睦活動委員会

・ 点 鐘 佐野会長

今週の会報担当：渋谷論会員